

# サクラが 咲かせた 人の縁

-大戸のサクラと齋藤家の物語-  
完全版



古くから深い緑に囲まれ、穏やかな暮らしが営まれてきた大戸地区。夷針

神社の鎮守の森を抜けると、そこには約千年に渡り、この地を静かに見守る大戸のサクラがあります。遠い昔から春の風物詩となっている山桜の大木は、サクラに寄り添い共に生きる齋藤家の人々によって代々守り継がれています。

## 「家族とサクラを絶やすべからず」 家訓を守り続けた齋藤家の人々

「義父母や義妹にまで、サクラは代々守り継いで行かなければならないと、とにかく念を押されましたし、戦争中も家は燃えても、家族とサクラだけは守れ」と言われた位、うちにとって大切な木なんです」

嫁いだ当時の様子をそう振り返ってくれたのは、齋藤利子さん。利さんは毎年花見に訪れる近くの小学校の子供たちから「サクラのおばあちゃん」と呼ばれていて、サクラの維持管理や訪れた人々へその歴史を伝え続けています。齋藤家は現在、利子さん、その娘夫妻の重男さんと美奈子さん、そして夫妻の子どもである裕樹さんと有紗さんの5人家族。先祖代々、農業を中心に漢方医、郵便局員、教員、保育士などをしながら、サクラの番人としての役割も担ってきました。今は高齢となった利子さんに代わって、重男さん夫妻が周囲の草刈りなどの手入れを引き継いでいます。

大戸のサクラは、町内で唯一、国の天然記念物に指定されています。一般的に、樹木の文化財は神社仏閣、海や山などの公共の場所にある物が指定されますが、このサクラは民家の一角に長年息づいている珍しいケース。江戸時代には株が直径メートルの大きさになり、太い幹の上で酒を嗜んでいた人がいたほどでした。しかし、約百年前の落雷被害や周辺の造林により次第に勢いを失って行きました。利子さん達の代になると、弱ったサクラの回復作業が行われました。サクラの日当たりを良くする為に周囲の杉を伐採、樹木医らと共に枝ぶりや土壌環境を改善するなど、懸命な努力の甲斐あって、今は元気な姿を取り

戻っています。

そんな淡紅色の花を一目見ようと、毎年開花の時期には全国各地から花見客が訪れ、地区で行われる大戸さくら祭や小学校で大戸のサクラをイメージにした「大戸さくら音頭」が踊られています。

齋藤家の尽力により、大戸のサクラは町の宝となり、今でも多くの人々の心に刻まれ続けているのです。



サクラの以前の姿。明治時代に落雷を受けて左側が折れてしまった



## 樹齡千年という新たな説 幻の名「シロヤマザクラ」

齋藤家には、齋藤子之太郎さんが、口伝で受け継いできたサクラの歴史を太平洋戦争末期の頃にまとめた伝承記が残されています。それを用い、学術的な視点でサクラの生い立ち、育成や管理方法の手がかりを紐解こうとした人がいます。

農学博士の古越隆信さんは、樹木の遺伝などの林業研究や林木育種分野において国際協力をした第一人者。数々の賞を受賞している研究者です。現在は齋藤家の近所に住む古越さんは、この地に越して来て、日課の散歩中に大戸のサクラと出会い、職業柄、次第にその樹齡と歴史に興味を持ち始め、関連する文献や資料を集めて伝承記を解説しました。そして2015年、全国の林業経営者が組織する大日本山林会の会誌「山林」に大戸のサクラに関する論文を寄稿したのです。

それによると、大戸のサクラは公表では樹齡500年とされていますが、伝承記ではその起源は約千年前までに遡り、当時の武将・源義家が持っていた枝であるとされています。サクラは針葉樹のように一本の幹が長く太く成長するのではなく、同じ株から多数の蘗（ひこばえ）が生まれます。そのため、二つの株から何本も幹が立ち上がるのですが、その幹はいわば株のクローン。つまり、たとえ株の樹齡が300年だったとしても、新しく出た萌芽や蘗の樹齡は0年になるのです。古越さんは「そんな再生を繰り返してきたものとすれば、大戸のサクラが最初の株立から数えて樹齡千年という推定も充分あり得ます」と新たな説を提唱しています。

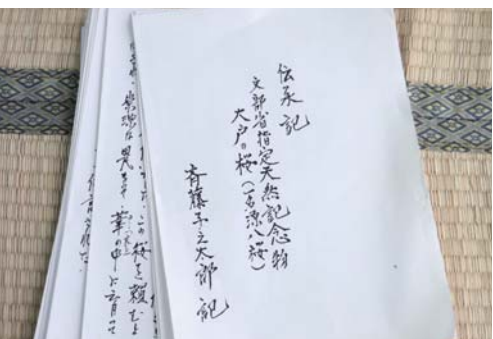
また、大戸のサクラはこの地域に生息する山桜の一種であり、桜博士と呼ばれるれていた植物学者の三好学教授と旧制水戸高等学校の野原教授が訪問調査した際に「シロヤマザクラ」という幻の名が命名された事も記されています。これまで幾度か株分けも行われ、現在は町内に3ヶ所、水戸市は水府橋近くの

那珂川河川敷、日立市の国立研究開発法人森林総合研究所林木育種センターに苗木を移植し、種を絶やさぬように保全活動も実施されています。

「齋藤家が代々、あらゆる負担も省みず、家訓に従って桜に対する深い愛情を持ち、保全に尽力して来たからこそ、今の樹体がある。花見の時には、その存在感やサクラが歩んで来た数百年の月日に思いを馳せて欲しい。そして、これからも地域住民による自然保護のシンボルとして、このサクラを保全し活用される事に期待しています」と語っています。

## サクラが沢山結んでくれた縁 それは、かけがえのない喜び

「母もそうですが、うちの家系は代々、人との関わりが好きなんです。なのでサクラを見に来た色々な人たちと話が盛り上がり、帰りは駅まで車で送って



今年も可憐な花を咲かせました

行く、なんて事もよくあります。それが縁で手紙や年賀状のやり取りをするようになったり。花見に来た大学生にうちで余っていたタケノコをあげたら、その後にわざわざお礼の品を持って来てくれた事もありました。父が亡くなった際には、花を持ってきてくれた人もいましたね。毎年サクラを見に来られる大学の教授さん、定点撮影にいらっしゃるカメラマンさん…。少しの会話から縁が育まれ、友人として私たちが会いに出掛けたりする仲にもなりました。サクラが結んでくれた縁は、数え切れないくらい沢山あるんですよ」と美奈子さんは語ります。

これまで様々なメディアで紹介されてきた大戸のサクラは、今でも遠方から訪れる人が後を絶ちません。そこにはサクラがなければ生まれなかった多くの縁があり、それは齋藤家の人々にとつてかけがえのない喜びとなっています。

数多の人々と交流を続ける祖父母や両親の背中を見て育った裕樹さんは、サクラを通じて、自分が沢山の人たちに支えられている事に気づき、改めてその価値を見直す事ができたと語ります。

「それほど肩肘張って、自分が守らなければいけないという意識はあまりないんです。すでに多くの皆さんに守られているサクラですから。これからもサクラのためにできる事を自分なりにしていきたいと考えています」

妹の有紗さんも、サクラを守ってきた先祖を誇りに思っています。「物心ついた頃から当たり前にあるものですが、他の家にはない特別な木。もしも兄が他の家に婿入りする、なんて事があった場合は、代わりに私が齋藤家とサクラを守り継いでもいいかな」と語っています。

毎年4月中旬、ソメイヨシノが散った後に見頃を迎える大戸のサクラ。その前にはベンチとテーブルセットが設置されています。たとえ花が咲いてなくても、訪れた人たちをもてなしたい齋藤家の心遣いの表れです。きっと皆さんが訪れた際も、「お茶飲んでいきなよ」と齋藤家の人々に手招きされながら、温かく迎え入れられる事でしょう。●